

共同研究者の部屋

アイスランドに学んで、地域の生活や自然を生かした教育を

野村 哲

アイスランド渡航は、他国へ行くのに比べて、経費が割高になるが、それでも30余年間、今年で10回目、滞在のべ日数が500日を超えて続けられているのは、第1に、プレートテクトニクスの真偽（以下、「プレート問題」と略称）を確かめる場所として最適であること、第2に、アイスランドの自然・人情が大好きであることである。ここでは第2の自然環境と生活・教育について考えてみたい。

アイスランドに滞在して地質調査をするときは、調査を始めた1980年代は、乗用車の中で寝泊まりしたが、同国が観光に重点を置くようになった1990年代からは、農村地帯に多く設置されるようになった簡易宿舎所を利用してきた。また、プレート問題を研究する、アイスランド南西部を調査するときの宿泊は、首都レイキャヴィークに近いハプナフォルズール市のゲストハウスを利用することが多かった。

ハプナフォルズール市の主要部は、数千年前に流れた溶岩の上に形成され、ところ所にサッカー場ないし、その数倍の大きさの、凹凸に富んだ溶岩だけの区域が残されている（写真1）。



写真1 市街地の中の溶岩原。溶岩原には、散策道や遊び場がある。2014.10.11.撮影

溶岩原に隣接した住宅は、真っ黒な玄武岩溶岩を割って取り除いたところにある。除かれた溶



写真2 溶岩原を囲んでいる住宅。住宅は自然界にとけ込んでいる。2014.10.18.撮影

岩は、くぼみを埋めて敷地を平らにする石垣に利用され、周辺の風景にとけ込んで違和感がない（写真2）。

1982年のある日、アイスランドの南西部にあるエイシャ山の急崖の調査に出かけたとき、羊を囲っている金網を通らざるをえず、持ち主の家を訪ねた。すると高校生風の女性が出てきて、快く許してくれた。成果をあげて帰るとき、再びお礼に訪れると、彼女は「どんなことが分かりましたか」というので、リュックの中の各種の石の中から、黒っぽい石を取りだして見せた。彼女はすかさず「ああ、これ玄武岩ですね」といった。

もう一つ、私を感激させた出来事が、後年になって起きた。アイスランドの気候が冷涼であるため、牧草の成長はすぐれず、各農家は、それぞれ己の羊を冬越しさせる牧草を確保するため、広い農地が必要で、たがいに500m～1kmほど離れたところに建てられる。私の地質調査は、パン・牛乳・野菜などを買い込んで、乗用車による車中泊で続けていた。ある日の夕方、農家から200mほど離れたところに止めた車中で、調査後の整理をしていた。まだ太陽が出ていた21時ころ、窓をたたく音がした。ふり返ると「お疲れでしょう、コーヒーを飲みに来ませんか」と呼びかける若い女性が立っていた。私は誘惑に負けて、農家に行き、コーヒーを飲み始めると、彼女が「あそこのベッドを空けたので、車をやめてあのベッドに寝てください」と指さした。ご主人は、私と彼女との英語の会話が分からないらしく、にこにこしながらだまって聞いていた。二人の子どもがいて、遊んでしまう恐れと、日程的に追いつめられていたのと

で、感謝の気持ちを伝え、おいとまをした。次の日からは、家から見えないところに車を止めて調査をつづけたのだった。ところが2週間後、再調査の必要に迫られて地質調査をして、帰りしなに農場のわきを車で通ったところ、遠方で働いていたご主人が、私に向かって手を振っていた。



写真3 台地の割れ目ギャオと世界初の国会設置場所（旗竿の場所） 2002.9.21.撮影

このようなアイスランドの国民性は、どのようにして生まれたのだろうか。それは同国の歴史に根ざしている、と思われる。アイスランドの国づくりは、大西洋の北端に浮かぶ無人島に、9世紀の後半になって、スカンジナビア半島のヴァイキングたちが、羊をつれて上陸したことに始まる。きびしい環境のもとで、助け合いながら生活を始めた。西暦930年には、1960年代以降、プレート問題で話題の“引き裂かれた大地の割れ目”に、世界初の国会を創った国である（写真3）。独自のアイスランド語を使い、外来語は委員会で、自国の言葉に置き換える新語を創っている。

私は長野県中央部、筑摩山地の中で育ち、両親に泣きついて高校進学を許してもらった手前、大学2年生になるまで、片道2時間半の自宅通学をしていた。土・日曜日は畑仕事や山林の下草刈りなどの手伝いをした。高校・大学の成績は、いつも進級すれすれであったが、反面、植物の生長や実りには、気くばりをする力が身についていた。となり同士、助け合って生活していたことなど、今になって振りかえってみると、アイスランドに似た環境であった、と思う。

今日の日本の教育は、教師の個性が活かされず、行政主導で進行し、個人を尊重して、日本

人らしい人をめざす教育ではなく、生産促進の道具、人材づくりに重点が置かれている、といっても過言ではない。

アイスランドの生活環境には、きびしいものがある。たとえば、首都レイキャヴィーク市の平均気温は、年間4.3℃、1月-0.5℃、7月10.6℃（[Iceland in figure 2014]による）で、かつては成長の遅い樹木を切りたおして家を建てたり薪に使っていたため、1970年代までに、かつての土壌は半減してしまった。これを克服するために、気候が共通しているアラスカの植物を輸入して、荒れ地に植林したり種まきをして、緑が復活しつつある。また、豊かな河川水と地熱を利用した発電所が造られ、高温の温泉水は、日本の水道のように各家庭に配湯され、全室暖房が実現している。「文化水準」は日本よりも上位にある。

これに対して日本では、恵まれた森林資源が無視されて森が荒れている。教育面では、子どもに競争をあおり、ひとり一人は孤立して、世間知らずな、自分本位の行動、果ては犯罪にいたる人もいる。

自然を学習する教育は、アイスランドのように自然界に出て、実物に触れながら行われるのがいい。外来の動植物が、どん欲に生きている姿、在来植物の、なすすべを失なったかのような元気の悪い姿を観察することができる。国際試合で優勝して帰国した「やまとナデシコ」に渡した花束が、在来種ではなく外来のナデシコであったことは印象的であった。

アイスランド人の知識の広さと心くばりは、人々の生活の中で、また教育の深さによって培われている、と思う。

現実に生きて、将来をめざしている子どもたちがいることを考えると、行政のせいにしていても始まらない。当面、ぐんま教育文化フォーラムや下仁田自然学校のような、自主的な教育文化活動の輪を広げていくことである。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

（群馬大学名誉教授・下仁田自然学校前校長）